

文化高知

2005年 5月 NO.125



「小さな緋色」^{ひいろ} 野口和葉

〈もくじ〉

ある禁煙宣言	吉岡諄一	2
50周年……そして	森田健太郎	3
第15回高知出版学術賞を審査して	中内光昭	4～5
高知って凄い! 東京帰りレポート	野並良寛	6～7
「春眠暁を覚えず」の季節に際して	原田哲夫	8～9
文化事業を市民とともに		10～11
住民力とタノシムチカラ	横田 恵	12
かるぼーと3月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

ある禁煙宣言

吉岡 諄一

三行か、四行も読むうちに最初の行に何が書かれていたのか解らなくなる。これでは駄目だともう一度読み返す。そうすると、一行目を追った眼(まなこ)が二行目を飛ばして三行目に達する。そうしたこと二度三度と続くものなら、それがいかに重要な文書であったとしても直ちに投げ出したくなる。

それだけではない。この間、ベルトの穴一個分ウエスト周りが肥大化した。ざっと六キログラムも太ってしまった。とりわけ顔面は、贅肉が集中付着したのではないかと錯覚するほどの状態にある。もともと張り気味であった両の鰓(えら)はさらにデフォルメされ、今では完全に寅さん風の形状になってしまった。禁煙開始後四カ月の有様である。

二十歳(はたち)以前に始めたの

で喫煙歴は長い。当時は、酒・タバコをやれない者は男じゃない、という社会風潮にあった映画全盛時代。裕次郎などといった少し不良っぽいヒーロー達が煙草をくゆらせ若者文化をリードしていた頃、ごく当たり前の感覚で吸い始め、少々気分が悪くなっても大人への登竜門だと自らを納得させてきた。以来四十年近く吸い続けてきたことになる。

だがその間、禁煙を試みたことも何回かある。風邪をこじらせ急性気管支炎を患ったときや、椎間板ヘルニアで比較的長期間入院したときなどである。その結果、実に五カ月もの間、禁煙を経験したこともあるにはあった。ところが、その五カ月間の禁煙体験が、結果的には、タバコをやめることをやめる、すなわち、皮肉にも喫煙を継続する契機となっていました。あくまで主観

的ではあるが、その五カ月間は、集中力、思考力の低下に悩まされ、イライラが募り、ひたすら短気になり、また際限もなく肥え太り、着衣の寸法がことごとく合わなくなってしまふなど、つまるところ、禁煙のメリットを凌駕するほどの絶えがたい苦しみを経験してしまっただけである。

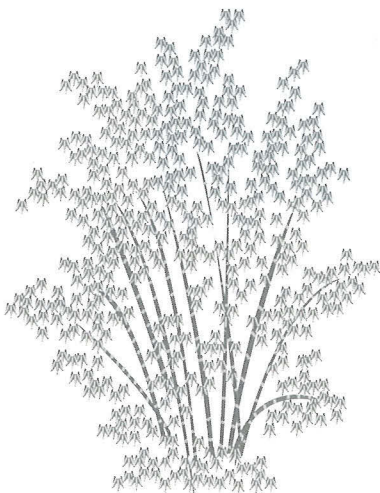
にもかかわらず、何故に再度禁煙に踏み切ったのか。

それは、昨年末の御用納めに遡る。その日、県知事から、高知医療センターの経営主体である高知県・高知市病院企業団の企業長を任命されたからである。高知医療センターの新機軸のひとつに全館禁煙ならぬ敷地内禁煙がある。企業長が喫煙のため無闇に敷地外に出ることは決して

許されないだろう。そう考え決意した。

その医療センターが開院して二カ月が経過しようとしている。救命救急センターや入院部門は当初の構想どおりに推移しているものの、その全ての機能が本格稼動するまでには至っていない。本格稼動には、この四月採用の九十名を超すスタッフがスキルを高め、それぞれの部署に馴染む期間も含め、もう少し時間を要することになる。加えて、企業長たる者の禁煙習慣が十分心身に馴染むようになるためにも、暫しの猶予を戴ければと願う次第である。

よしおかじゅんいち／高知県・高知市病院企業団企業長



五十周年……そして

森田健太郎

今年、立脇千賀子バレエ研究所が五十周年を迎えます。七歳から叔母である立脇千賀子に師事し、現在、東京の牧阿佐美バレエ団で踊っている私にとっても、とてもうれしいことです。母、叔母、従姉もバレエに携わっているバレエ一家なので、自然とバレエを始めることになった私ですが、今となっては続けてきてよかったと思っています。

一九九五年に文化庁芸術家在外研修員に選ばれ、英国スコティッシュ・バレエ団に一年間留学し、翌年から団員(ソリスト)として入団できたことが、特に素晴らしい経験になりました。約二年ちよつとの外国での一人暮らし、真冬にガスを止められるというピンチもありました。バレエに関しても、ダンサーが職業として成り立っているという、日本とは違う状況に驚きもしました。日本で

は舞台に出ないと収入はありませんが、向こうでは、怪我をして休んでも、ちゃんと給料をもらえるのです。ダンサーとして保障されているので、安心して踊ることができました。

ダンサーたちもみんな優しく接してくれたので助かりました。バレエに限らず、日常生活でも助けてもらえたのは本当にうれしかったです。

舞台に関しても、特にお芝居(マーム)でいい経験をしました。すごく自然なんです。本当に話しているように芝居をするので、こちらも合わせないと一人だけ変になるのです。この経験は今も非常に役立っています。芝居をするときは自然に、というのを心掛けています。

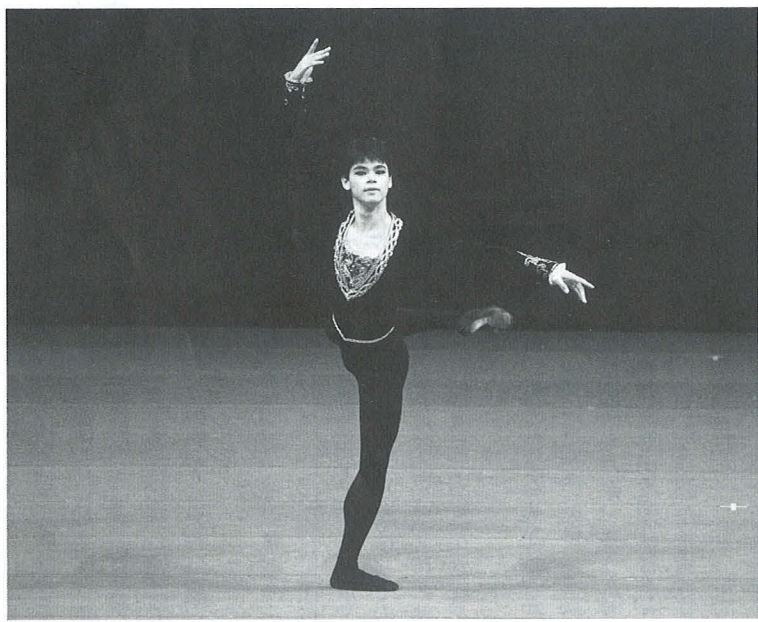
日本に帰ってきて七年ぐらいいなりますが、日本のバレエ界も少しずつですが、変わってきていると感じます。若い世代の子たちも頑張っ

いますし、なにより男の子が増えたのはうれしいことです。私の小さいころには男の子はほとんどいなかったのですが……。バレエを観に来る男性もずいぶん増えたように思います。このように少しずつでもバレエがポピュラーな文化になっていってほしいと願っています。私も現役で踊っている今も、バレエ団やその他の若い後輩にアドバイスをする事が多くなってきました。

高知で踊ることにも年に一回ぐらいいしかありませんが、若い子たちが頑張っている姿を見ると、まだまだ負けないと気合が入ります。一緒に頑張るながら、立脇バレエを盛り上げていければと思います。高知でもバレエの公演が増え、身近な文化になり、たくさんの方々に観て楽しんで

いただければと思います。そして、もっと若い子たちがバレエに興味を持ち、素敵なダンサーが一人でも多く育ってほしいと心から願っています。

もりたけんたろう／牧阿佐美バレエ団ダンサー



第十五回高知出版学術賞を審査して

中内光昭

高知県における学術の振興、および高知県に関する学術の振興を目的に本賞が設けられてから十五年になる。その間、応募書籍の数は、ほぼ十五点から二十点の間で上下してきた。二〇〇四（暦）年内の出版物を対象とする今回は、応募数十二点で、開設以来最も少なかった。数にこそ恵まれなかったが、個性的で、密度の濃い作品が多く、分野のバランスもほぼとれていた。

第一次の審査は二月十日に行われ、半数の六点が第一次審査をパスした。六点左右それぞれについて、四名の審査委員（総数は八名）が精読して講評を作製し、第二次の審査（三月十日）に臨んだ。その結果、受賞作に選ばれたのが、次の三点である。なお、受賞作に順位は付けられていないので、作品の受け付け順に紹介する。

田村安興著

『ナシヨナリズムと自由民権』

清文堂出版（三三六四ページ）

「ナシヨナリズム」と「自由民権」とは、あまり相性のよくない、場合によっては、対極に位置する概念である。この二つのキーワードが、明治初期の「自由民権運動」では、深層で深く結びついていたのではないかと、というのが、著者の本研究の動機であり、結論でもある。

著者は「明治維新以降の日本のナシヨナリズムの発達とその根底にある愛国主義、さらに近代日本の起点となった文明開化論の定着過程における民権派の事蹟を検証することによって、彼等の真の役割を明らかにする」ことを目的に、史料を博搜し、時系列では神話にまで遡り、空間的には、日本のみならずアジアにも目を配って、民権運動を「日本におけ

る数少ない、在野の愛国主義運動であった」と位置付けている。

自由民権運動が、末期には、ナシヨナリズムの色彩を帯びてきたことは、従来から指摘されてきたことではあるが、著者は、そもそもこの運動を起こした民衆の心理の深層に、古くからの民族的な「集合的無意識」が潜んでいたと考えている。

歴史的事象を「当時の時代背景や政府の政策との比較の中で読み取る」という研究姿勢が高く評価され、現在の「一般常識」に一石を投ずる点でも、意義深い学術書であると評価された。

坂本保富著

『幕末洋学教育史研究―土佐藩「徳弘家資料」による実態分析―』

高知市民図書館（六一九ページ）

我が国における西洋事情に関する

との関連など、当時の洋学の横の広がりや関係性の比較解明にも有用な資料である。

著者は十数年にわたり、上記資料を解読、整理し、多くの関連史料との照合により、幕末期の日本国内での洋学や西洋知識の受容体制を明らかにしている。土佐においては、徳弘門人の活躍により、各階層の藩民が砲術教育と共に、西欧の合理精神の洗礼をうけており、それが、土佐人の維新时期での活躍の一因と考えられると述べている。

洋学受容の実態とその歴史的意義を着実に検討した学術書として、高く評価された。

武藤整司著

『人間の輪郭―共生への理念―』

不二出版（三五六ページ）

一般の人間にとって、哲学の意義は（先哲の業績を）「学習する」とより、（人生や人間を）「哲学すること」にあり、前者は後者に指針を与えることに意味がある、とはよ

く聞かれる言葉である。

著者は二十一世紀の、戦争、環境汚染、経済至上主義、弱肉強食、いじめ、差別、などという、具体的な問題を学生と共に「哲学」することにより、学生に「哲学」を体験せると共に、人間や教育を考えてきた。本書は、その実践記録であり、人間や教育を巡る思索の報告書でもある。そのため、本書では、研究書、教育実践報告書、啓蒙書の三者が混然一体となり、何の違和感もなく共存している。

学問（洋学）は、幕末になると、「蘭学」と呼ばれ、主に医学、本草学などに中心を持った流れに加えて、軍事技術をきつかけに、西洋の科学・技術を学ぼうとする流れが台頭してきたが、後者についての史料は限られていた。

土佐藩の砲術師範、徳弘孝蔵（一八〇七―一八八一）は、江戸に派遣されて、下曽根塾に学び、帰藩後、多くの門人を育てた。孝蔵は、その門人でもある長男と次男と共に、塾や砲術教育に関連して膨大な資料を残した。

この資料の大半が保存されていた徳弘家が、一九八〇年に火災に遭い、資料の一部は焼失したが、残り（五八一点）は高知市立図書館に移され、職員の実業により、目録が整備され、全貌が明らかにされた。

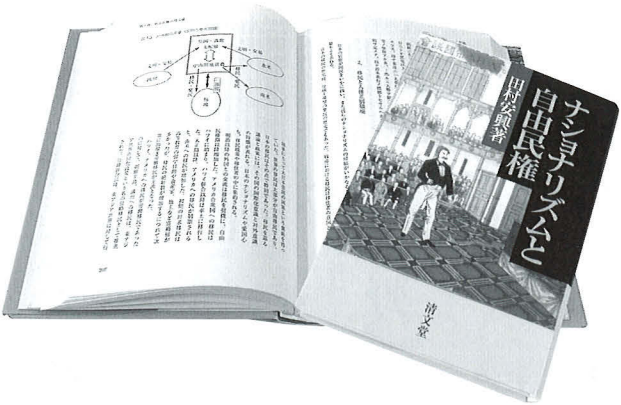
著者によると、これらの資料は、（一）幕府公認の最初の西洋砲術家、高島秋帆の（江川太郎左衛門と並ぶ）高弟である下曽根信敦の実践した私塾教育の実態を直接記録した、希有かつ貴重な資料である。（二）徳弘父子が藩内で展開した教育の実態を示しており、軍事科学を媒体とした洋学の地域的な展開過程を解明する上で、貴重な基本資料である。（三）下曽根塾と江川坦庵や佐久間象山ら

身近な問題を取り上げて、表現は軽妙、したがって、内容は極めて理解しやすい。結論は多く常識的であるが、「哲学者」が常識的な結論を述べるのがむしろ新鮮に感じる。環境問題の底に人間第一主義があること、人類が、現在のような、「経済」や「技術」万能の生き方を続けるならば、終末の日の近いこと、などは特に目新しい指摘ではないが、その根拠が倫理的観点からよく整理されて提示されている。人間にとって、「居場所」が重要な意味を持つことを指摘しているのは、鋭く、斬新である。

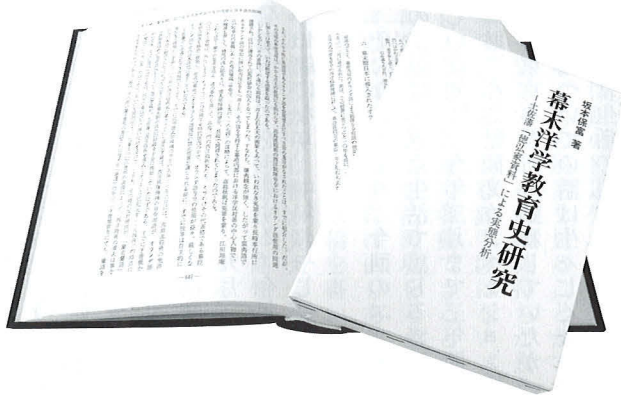
現代的課題を素材として、学生参加のもとで、新しい授業形態（映画鑑賞等）を模索しながら実践し、その結果を踏まえて考察するという、その手法は、一審査委員をして「もしデカルトが現代に生きていたら、同じ問いかけをするのではないかと」言わしめたほど論理的である。何よりも、著者のこのような研究態度が高く評価された。

なお、これらの著作と共に、澤村榮一著『英語と日本語のはざま』（ふたば工房）が最後まで審査の対象に残ったことを付け加えておく。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）



「ナシヨナリズムと自由民権」



「幕末洋学教育史研究―土佐藩「徳弘家資料」による実態分析―」



「人間の輪郭―共生への理念―」

高知って凄い！

東京帰りレポート

野並良寛

二〇〇一年一月に発行された「文化高知」99号に「五年後に面白い仕事ができますように」というタイトルでエッセイを書いた。当時35歳。お約束ではないが、二〇〇五年四月からまた懲りずにクリケットと、高知の生活タウン誌「季刊高知」（弘文印刷との共同発行、九月二十五日発売予定）を再開する。今年十一月で40歳になり、中年おやじはロマンを追うのである。

そんなことより、今回のエッセイの主題は「東京生活で感じる素晴らしい高知」。今年三月まで三年間、（財）高知県観光コンベンション協会の東京事務所勤務していたが、仕事についての話は生々しくなるので、日常生活の視点で書いてみる。

実はこの三年間、東京都大田区、千葉県松戸市、埼玉県さいたま市と転々と住所を変えてきた。契約していた某パレスの関係のためだが、結構喜んで引越しをしている。知らない町に住むことは、スーパーマーケットやクリーニング屋、本屋、飲食店など生活に必要なお店を知る苦労さえ乗り越えれば、あとはさりげなく好奇心を満たしてくれる発見が多くあった。

東京生活で最初に住んだ大田区馬込は静かな住宅地で、飲食店等は駅

前周辺に集まっていた。私は西馬込駅から徒歩十五分の住居に住んでいたが、家の周りは、庭に綺麗な花々を咲かせている住宅がずらっと道沿いに並んでおり、春から初夏まではまるで花畑を抜けて歩いていくような感じで、あまりは花木に詳しくない私でも嬉しかった。また近くには桜並木が一キロ弱続いているところがあり、その美しさと、毎日常家の周りに落ちた花びらを掃除している人たちに感心。犬を散歩させている人の姿は朝晩を問わず多かった。

さいたま市大宮区は、なんといっても手頃な金額で美味しい寿司屋がある。昼ランチのちらしを注文する店、夜の食事を使う店、出張帰りでもどうしても寿司モードに入っている時にいく近所の店など、たった一年で3件の行き付けを持った。特に昼ランチのちらしは840円で中トロ、ウニ、イクラをはじめ赤身系、白身系、貝類の魚介が井から溢れんばかり盛られており、ボリュウムも味も絶品。毎週土曜か日曜に夫婦揃ってちらしを注文し、私はビールや焼酎を飲むことがパターンとなっていた。ビールを注文すると無料のつまみとして鮪のづけやイカゲソが出てくる。そんな気配りも嬉しかった。大宮は寿司屋だけではなく、どの飲食店も

値段と味を比較して満足度の高い店ばかりだった。これこそ「町の持っている底力」だと思ってしまう。

東京での生活や仕事に欠かせないのが電車の移動だ。電車通勤だけでも一時間を越えるので、移動時間は私の読書タイムになる。満員電車のため席に座ることはできないので、つり革につかまり立ったまま読むことになるが、慣れてくると本に没頭することができた。混雑している中で周りの人と体が当たることが気になつたり、視線がバッチリ合気まらずに雰囲気になつたりすることもあり、電車の中で本に没頭できることは、ある意味、自己防衛かもしれない。しかしこの三年間で数百冊の本を読めたことは、将来少しは自分にリターンがあるのではないかと信じている。

一度、大宮から上野の通勤中に、私のとなりにはいる50代のおじさんと20代の女性が言い争いを始めた。その言い争いが五分以上続き、おじさんがブチブチと責めるように女性に言い出したので「もう、ええ加減にしろよ、おっさん」と思いながら勇気をしぼり「電車の中なので、そろそろ言い争いはやめませんか？ 周りの人たちも気にしていると思いませんか」と二人に言ったら、おじさん

が「君は何も事情を知らないの！ 口を出すな」から始まって、「電車の中で注意されたら俺が彼女に何かしたみたいじゃないか」などなど上野駅まで攻撃がこちらに回ってきた。当事者の彼女は駅に着いた途端そそくさと走り去り、ホームに残された二人は引くに引けず、おじさんが警察に行つて白黒をつけると息巻くと、私も頭に来ていたので「それじゃ警察で判断してもらいましょう」とツツパリ、上野の鉄道警察で事情聴取を受けた。警察官を前にお互いの言い分をいいあい、警察官もまあまあ結果だった。まるで二流のテレビドラマのような展開でドキドキしたが、もう二度と体験できないだろうなとも思う。東京ではよく電車の中で事件が起こる。ギューギュー詰め満員電車は、普段冷静沈着な人をも取り乱させる何かがあるのかもしれない。

休日には寄席、お芝居、映画、競馬、プロレス観戦などを楽しむことが多い。寄席といつても鈴木や池袋演芸場のような大きな小屋ではなく、日本落語協会が金曜、日曜限定で行っている協会事務所2F「黒門亭」で聞く。嘶家は畳に座る十五名程度のお客を相手に古典落語を話す。嘶

家と私たちの距離がとても近く、贅沢な空間であり、緊張感が溢れている。プロレスは東京ドームから始まって日本武道館、後楽園ホールと、大中小の会場を制覇。プロレスを観戦して「感動する」ということを疑う人は、是非ノアのプロレスを見て欲しいものだ。

ここまで書けば、東京生活は楽しく刺激的で、となる。しかし三年ぶりに東京から戻ってきた私を感じる高知の素晴らしさも知って欲しい。

高知市内に住む私にとって、市内の移動は雨の日以外は自転車で行っている。町の風景を見ることができ、風を感じて、こんなに気持ちが良い環境にも優しい移動手段はない。なにより、自転車移動できるという町の大きさが、生活環境を考えれば優れている。町中には山もあり川もあり、海が近い。原稿を書いている今の部屋からは桜が見え、柿の木の新芽が眩しく見える。高知の当たり前の風景は、東京からすると贅沢な空間だと思える。テーマパークはないけど、車で三十分も移動すれば河原でバーベキューやキャンプができる。舞台芸術を選ぶ選択肢こそ東京と比べ少ないが、高知から四国まで行動範囲を広げれば、十分対応できる。

以前タウン誌の編集をしていた頃、県下全域を回り、地域の人に触れ、その土地の祭りや食文化など風俗、生活文化に接する機会があった。その時に受けた「高知って凄い！」というイメージは、今も体の中に残っている。東京での生活も楽しかった

が、高知って凄い！ をもう一度自分の中で消化して、県内外の同世代（30〜40代）に伝えていくことを仕事の生業にしていきたい。

（のなみよしひろ／クリケット代表）





原田 哲夫

今年桜の季節が昨年より十日程遅いようだ。これは三月の終わりに来て、まだ朝晩の冷え込みが厳しいことが原因だろう。ここ十年ぐらい、昆虫(アメンボ類)とヒト(特に子供たち)の生きる営みが時間によってどのように変化するかを調べている。アメンボ類については、最近の急激な温暖化の影響が明らかにありつつある。そうすると、この桜の開花の遅れは少し意外な気もする。新学期を迎え、新しい職場や学校ではつらつとした気分です。新年度のスタートを切りたいものである。しかし、ここで一つ気になるのは、いわゆる「五月病」である。新環境への適応障害が主な原因と考えていらつしやる向きもあると思うが、どうもそうでもないらしい。日本やトルコ、フィンランドなどでの研究から、自殺の発生率は北半球ではどの国も五月が最も多いのだ。恐らく、日長や温度の上昇への何らかの生理的反応に関係していると思われるのが自然であ

る。ここで、気分の落ち込みや抑うつに對してある程度効果のある生活の工夫を紹介しよう。

- 1 朝食にめざし、鶏卵、納豆、豆腐、かつおぶしなどトリプトファンを多く含む食品を十分取る(日本の正しい「和朝食」を取っていればよい)。
- 2 昼間太陽光を多く浴びるようにする。晴れた日などは日陰(一万ルクスを超える)でも十分。

まれる食品(卵、めざし、納豆、かつおぶし、豆腐など)を摂取しても消化吸収して、脳に供給されるのは夕方から夜になってしまふので、セロトニン合成には時間的に間に合わない。もうお分かりのように、朝食で取らなければ意味が無いのである。また、昼間強い光(太陽光)を浴びるとセロトニンの合成量が増すことも分かっている。上記の二つの工夫はもろろ大人の五月病を予防する上で有効であるが、子供たち、とりわけ、学童期前の乳幼児の健全な生活リズムをつくる上で大人よりはるかに有効であり、また重要であることが私たちの研究グループの最新の研究結果から明らかになっている(廣谷と信宮の修士論文プロジェクト)。

この研究には、高知市の保育園や幼稚園に通う約八百名の乳幼児と保護者のみなさんに御協力いただいた。調査は質問紙を保護者に配り、答えをいただくという形で行った。質問紙には朝型・夜型度(七項目の質問紙)や睡眠の質などの項目が含まれている。問題の朝食の内容では、約十五項目の朝食用の食品を選択肢として提示し、普段朝食で取っているものをすべて選択してもらった。選択した食品に含まれるトリプトファン量を、各食品の単位重量当たりの含有量に一食当たりの標準摂取量を掛けて算出し、摂取トリプトファン量指数とした。特に、乳幼児ではトリプトファン摂取と生活リズムや睡眠の質の間に非常に大きな関係がみられた。トリプトファン摂取が多い乳幼児ほど、はつきり朝型で、入眠困難や起床困難が少なく、睡眠の質がよかった。トリプトファン摂取と生活リズムの関係は学童期に入ると乳幼児ほどはつきりはみられなかったが、トリプトファン摂取量が多いほど朝型なのは、大学生でも見られた。幼児期にこれほど、朝食時のトリプトファン摂取が生活リズムや睡眠に関係しているのは、脳内のセロトニン濃度やメラトニン濃度が幼児期には成人の数倍高いことが原因であろう。言い換えると、それだけ多くのセロトニンやメラトニンが脳内に必要であるということになる。

はそのまま夜間にメラトニンに置き換えられるので夜はぐっすり眠れるのだ。

前や生理期の体と心の不調(生理期前症候群 Premenstrual Syndrome =PMS)を訴えやすくなる。つまり、思春期の極端な夜型化は生殖機能の発達と成熟に支障を来しかねないと言える。

を質問紙で聞いている。)の間にはいつ、どの年齢の子供を調べても深い関係が見られる。夜型化すると、精神衛生が悪化するといっても、年齢によってその傾向は異なる。どうも幼児など年齢が下がるほど、怒りっぽかったりイライラしたり、「攻撃性」が増す傾向がみられる。逆に大学生・専門学校生などは、夜型化によってむしろ「抑うつ的」になる傾向がある。夜型によって精神衛生が悪化するのは、私たちの体のリズムを形づくる二つの体内時計(主時計=自律神経の交代など基本的な生理機能を支配、第二時計=睡眠・覚醒リズムを支配)が外れやすくなる(カップリングが悪くなる)からであると考えられる。不登校になって長期にわたって引きこもっている場合や、交代制勤務に従事したり、時差ぼけになったときなどは二つの時計が外れている極端な例と言える。

からイライラし始め、旅の間ケンカが絶えず、とうとう成田離婚ということになりはしないかと心配である。もともと西向きの新婚旅行(ヨーロッパなど)に行っても帰国したあとの時差ぼけにより危険な状態になるかもしれない。

二十四時間型社会はますます私たちの生活に浸透してくる。最近の高知市内での私たちの調査では中学生女子生徒の約65%が携帯電話を持っている。男子は35%しか持っていない。問題なのは女の子たちの携帯の使い方である。携帯を持っている女子中学生の約三割が夜間に一時間以上送信しているのである。たしかに、テレビの深夜番組やテレビゲーム、コンビニの利用も彼らを夜型化している原因であると考えられるし、実際に私たちのデータがそれを物語っている。しかし、ここ七年ぐらい続いている女子中学生に見られ、今も進行している夜型化はとどまるところを知らず、我々はその原因の一つが携帯の使い方にあると見ている。女性の生理周期は約一カ月のリズムをもった複雑な生殖機能である。この機能が成熟する思春期にある女子中学生が極端な夜型になることはかなりこの生殖機能の発達・成熟に悪影響を及ぼすらしいことが、私たちの研究グループのスタッフである竹内日登美の博士論文プロジェクトにより分かってきた。夜型の中学生ほど、生理周期が不規則になり、生理

幼児から大学生まで、ここ数年で夜型化しているのは私たちの質問紙データにより明らかだ。では夜型化がなぜ体に悪いのだろうか? 夜十二時ごろ成長ホルモンの分泌のピークが訪れる。でもそのピークは眠っていないと十分高くない。しかも単に眠っているだけでは不十分で徐波睡眠という大脳新皮質の電気活動が抑えられているステージ、いわゆる「脳の睡眠」の状態にないといけないことが分かっている。成長ホルモンはなにも子供だけ分泌しているわけではない。大人も分泌している。昼間活動することによって体のあちこちが傷つくが、この成長ホルモンが傷の修復に働く。従って世の婦人方も毎日午前さんに休まれていれば、しわの数が増えてしまうかもしれない。夜型化で成長に問題が生じるほかに、最も問題が深いのは精神衛生の悪化である。これまで、約十年調査を続けているが、朝型・夜型度と精神衛生(気分の落ち込み、怒りっぽさ、イライラ、キレルなど

最近精神科の領域でも、この二つの時計が外れることが精神疾患の四割の病氣と関係があるという報告もあるくらいである。時差ぼけがひどくなる東向き(例えばサンフランシスコなど)のフライトで新婚旅行に行くのはあるいは危険かもしれない。せっかくアメリカ西海岸に到着したのに、新郎新婦が三日目ぐらい

もう少しすればビアガーデンの季節である。ここで商売がら、どうしてもチェックしてしまうのは、乳幼児がどれだけビアガーデンにいるかである。二、三年前から、ビアガーデンで奇声を発しながら走りまわる幼児を確認することがある。いつもと違い、酔っ払って高揚している大人たちにおおられていられるかもしれない。しかし、彼らの脳内では、分泌されるべきメラトニン濃度が低く抑えられ、またそれによって彼らの体内時計が確実に遅れてしまっている。二十四時間型社会の中でせめて、少なくとも学童期までは、正しい朝型生活を子供たちに保障しなければと焦っている今日のごころである。なぜなら、乳幼児の極端な夜型生活によって、将来どんな異常が彼らの心身に起こるかそれこそ誰も予想できないから。

文化事業を市民とともに

高知市文化プラザ活性化事業 ほか新年度自主事業について

◆文化施設の活性化とは？

全国に2000館とも言われる文化施設―地域住民のための文化活動の発表の場であったり、一流の芸術を提供したりと、その設置目的によって運営の内容はさまざまです。これまででは、施設を建設すれば事足りるとする考えも多く見られましたが、いまソフトの時代、その施設が何を指してどんな事業を行っていくのか、厳しく問われる時代となりました。また、一般的には聞き慣れない言葉ですが、「指定管理者制度」(※)への移行時期に差し掛かっており、文化施設の運営、開催事



業とその成果などについて、市民への説明責任をも果たしていかなければなりません。一方的な文化事業の提供ではなく、生活や地域に根ざしたプログラムを芸術文化を切り口として提供あるいは市民と創り上げていくことが求められています。そのような状況の中で、高知市文化プラザは昨年開館三周年を迎え、運営も軌道に乗り一定の認知も得て

きたと思われれます。運営を任せられている高知市文化振興事業団では、文化プラザの一層の活性化を図ろうと平成十六年度に「財」地域創造から助成を受けて、「高知市文化プラザ活性化計画策定事業」に取り組みました。この事業は「地域における文化施設の中・長期的(三〜五年)な活性化計画に対して支援」し、「先進的な芸術文化の拠点作りと美しく心豊かなふるさとづくりの推進に資することを目的」(財)地域創造の要項より)としています。音楽・美術・演劇・まちづくり・生涯学習・行政など12の分野から14人の委員の方にお集まりいただき、昨年五月から毎月二回程度の検討会を開催しました。

◆芸術文化がいきがいとなる地域社会の創出

九回の検討会を経て、議論は20頁の「高知市文化プラザ活性化計画」としてまとまりました。高知市を取り巻く文化状況から説きおこし、基本方針としてまずこれからの社会の

流れを「分権・市民参加」というキーワードに求めました。そのなかで文化プラザを「芸術文化の創造拠点」として機能させ、市民自らが表現者として日常的に芸術文化に触れられるような「芸術文化の創造活動の日常化」を図るとしています。そのような活動の延長線上に「芸術文化がいきがいとなる地域社会の創出」を目指しています。

この3つの方針の下に以下の4つの目標を定めました。

- ①芸術文化を創造する人材の育成
- ②市民参加による創造事業の推進
- ③優れた舞台芸術の提供による鑑賞者育成
- ④学校・地域・他の文化施設との連携

①では専門家による芸術分野の「頂点」の引き上げを図り、②により市民の文化体験の機会を増やして「裾野」を拡げていきます。③では直接本物の舞台芸術に触れることで劇場を身近に感じてもらい、④では施設内に留まらず、外部に向かって活動の場を拡大していきたいと考えています。

◆活性化計画12のプログラム

前記4つの目標の下に6つの施策

を置き、12のプログラムを決定しました。

○地元アーティストの公募と公演の実施 〓初年度はテストケースとして音楽分野とし、小ホールで地元で活動する演奏家を公募する。

○地元アーティストの作品審査と展覧会 〓美術分野の企画で、作品審査の後、会場提供の支援を行い発表の機会を提供する。

○演劇ワークショップ・ダンスワークショップ 〓トップレベルのアーティストに直接触れる機会を提供する。ダンスワークショップは高知出身のノイズム・井関和子さんと交渉中。

○演劇活性化ワークショップ 〓高知出身の劇作家・明神慈さんを講師に八月に開催。別の時期に学校でのワークショップも検討中。

○市民ミュージカルの制作 〓過去のミュージカルから一歩踏み込み、芸術レベルの向上と人材育成を目標に制作を開始する。

○企画公募による共催事業 〓市民から文化事業の提案を公募し、審査会を経て優れた企画に対して会場提供支援を行う。

○やまたのおろち 〓六月四日(土) かるぽーと大ホール/第一部は絵本『やまたのおろち』をもとに高知在住の音楽家の作曲・演奏・朗読とス

ライド上映、第二部は8頭立て大蛇が舞う島根県の石見神楽の上演。

○アーティストバンク事業 〓学校派遣事業 〓さまざまな分野の地元アーティストを登録して、必要な学校などへ派遣していく。

○かるぽーとアートウェブ計画 〓かるぽーとの地域性を切り口として「まち歩き」や「地域のお宝発見」などのワークショップを開催。

○詩のボクシング高知大会 〓市民自らが自己を表現し、幅広い世代の注目を集めている市民参加企画。

○美術中級講座 〓初心者次のステップを用意し、市民の美術分野でのレベルアップを図る。

このように市民との結びつきを強めて、地域の中での文化施設の役割を文化事業を通して考えていきます。

◆このほかの文化事業について

○わいわい！子ども音楽会 〓六月十八日(土)大ホール/「子連れで音楽



©CLAMP イラストレーション/CLAMP

を聴きたい、子どもに生の音楽を聴かせたい」などの要望に応えた音楽会。昨年の好評に付き今年も鏡野吹奏楽団の出演で開催します。

○ミュージック・ストリーム 〓音楽コンクールで優秀な成績を収めた一般の団体や学校におけるクラブ活動など、今年最も輝いたグループを紹介する音楽会。時代を担う演奏家たちを市民も応援します。

また、今年も「高知市文化体験プログラム支援事業」では美術体感イベント「あなたダビンチ ほくピカソ」(六月五日(日))に始まり、「小

中学生詩のボクシング」「夏休み演劇ワークショップ」など9事業を行います。今年が高知こどもの図書館と一緒に本をテーマにしたワークショップを初めて開催します。

横山隆一記念まんが館では3つの企画展示をはじめ、まんがフェスティバル、まんが体験イベントなど、まんが文化に親しめる催しを企画しています。

○CLAMP四展 〓七月一日(金)〜九月二十五日(日) / 『カードキャプターさくら』などで人気の4人組漫画家集団の巡回展。10代〜20代の女性を中心に熱狂的な支持を集め、デビュー15周年を迎えています。

○第四回高知出身まんが家展「くさか里樹展」 〓十月一日(土)〜十二月四日(日) / 『ケイリン野郎』で人気の地元漫画家を取り上げます。

○地元まんがグループ展 〓平成十八年二月〜三月予定/高知在住セミプロまんが家たちの作品展。

○まんさいーこうちまんがフェスティバル2005 〓十一月三日(木)・祝) / かるぽーとがまんがのテーマパークになります。子どもから大人まで、一日まんがで遊んでください。

赤岡町絵金蔵は、今年の二月十一日にオープンしたてきたてはやほの施設で、絵金まつりの雰囲気と絵金の人物像、そして絵金と赤岡町とのかかわりなどを、三つの展示室と映像ホールで立体的に紹介していま

横田 恵

住民力と タノシムチカラ

学芸員シリーズ⑩

また絵金蔵は、昭和四年築の米蔵を改築したほんとうに小さな施設で、当初、年間入館者数を八千人と見込んでいましたが、おかげさまで三月末までの五十日弱で四千三百人を超

えるお客様に來館していただきました。そういったお客様のご感想で特にうれしかったのは、「赤岡町の住民の方が優しかった」という声がとても多かったことです。

毎日の蔵の運営は、私と副蔵長のどちらかと、町民ボランティア（ほとんどは昔のお嬢様方）二十数名のうち一人の組み合わせという二人体制で行っているのですが、この町民ボランティアの方がいかいしくお客様の案内をしてくれているので、展示室では住民の視点からの絵金像を語り、観覧後のお客様にはお茶のお接待と世間話に参加しています。そのおかげで蔵でゆっくりされるお客様も多く、中には出発予定時間をオーバーして慌てて帰られる方もいらつしやいます。帰られる時のお客様の笑顔と、お客様以上にうれしそうなボランティアの方の顔を見るのが私の密かな楽しみの一つなのです。そしてボランティアさんは自分の

当番ではない日でも、「どうぞね」とやってきてくださいます。ひととおり掃除などを手伝い、お客様の案内をして、世間話をして帰っていくといった具合で、実際は蔵にはたいして二人以上のスタッフがいるのです。そして不意に団体のお客様がいらした時には、「庭におつたら蔵の

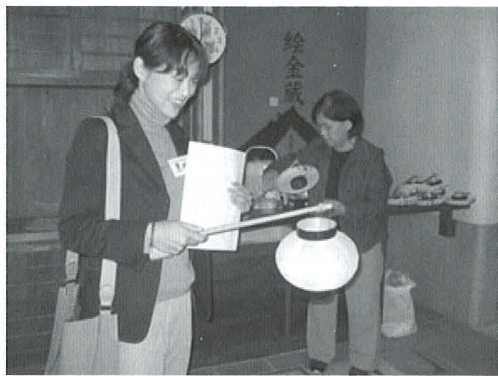
方向に人がどっさり行きよったとき、大丈夫やろうかと思うて」と何人ものボランティアさんが駆けつけてくれます。まさに現代の「いざ鎌倉」といった感じなのです。蔵の外でも商店街の方をはじめ町の方々が、道に迷っているお客様を蔵まで連れてきてくださったりと絵金蔵にかかわっていただいています。

二十歳代半ばの蔵長・副蔵長が切り盛りしているのが心配でというのもあるでしょうが、何より八年前に及ぶ住民によるワークショップを経てこの絵金蔵が出来上がったという経緯もあって、「私たちの絵金蔵」という思いと赤岡の人たちの住民力を強く感じます。

また赤岡町では絵金まつり（七月第三土・日曜日）をはじめ、どろめまつり（4月最終日曜日）、冬の夏祭り（十二月第一土・日曜日）というユニークな催しが行われています。これらは町民の方々が総力を挙げて企画・運営に携わっていて、町民自ら楽しんでやっていると特徴です。このような住民力と「自分たちが楽しくないとお客様も楽しくない」というスタンス（自己満足で終わるのはいけません）は、絵金蔵運営の原動力となっているともいえ、「絵金蔵を中心として町全体を楽しんで

いただこう」と絵金蔵発の町あるきイベントも町民の方々に交えて企画中です。

絵金蔵は県立施設などのように大きい予算はつきませんし、ましてや企画展示室を持たない絵金蔵にとっては、赤岡町の「住民力とタノシムチカラ」が運営のキーポイントとなると思っています。学芸員として研



究を行っていくと同時に、この「住民力とタノシムチカラ」を「日本一小さい町・赤岡町」（来年には合併しますが）だからこそできる強みとしていきたいと思っています。

よこためぐみ／絵金蔵 蔵長
（くらおさ）

高知市文化プラザ かるぽーと 3月の事業のご報告

◆オペラ人形劇「火打ち箱」

子どもたちに優れた「生の舞台」を提供してきた「かるぽーとキッズシアター」。デンマークの童話作家アンデルセンの生誕二百周年の今年、「音楽劇団アンダーグラウンド」を招聘し、三月五日・六日、小ホールで三回の公演を開催しました。

演目は、アンデルセン童話「火打ち箱」を、オペラ歌手が人形を操りながら生で歌うという「オペラ人形劇」にしたもので、すべてデンマーク語で上演されました。

舞台には、お姫さまなどの人形が次々に現れ、子どもたちは不思議な世界に引き込まれていきました。オペラの名曲も披露され、観客は斬新な「オペラ人形劇」を堪能しました。

◆谷川さんと詩で遊ぼう

子どもたちにさまざまな文化を体験してもらおう「高知市文化体験プロ

グラム支援事業」の一つとして、三月十三日、小ホールで二時限の「詩と音の公開授業」を開催しました。

先生は、詩人の谷川俊太郎さんと、息子でジャズピアノニストの谷川賢作さん。教室のセットの中、小学生から高校生まで生徒二十九名が出席し、約二百名が参観しました。

授業では、俊太郎さんの指導で生徒たちが詩をつくり、賢作さんがピアノで自在に曲をつけて歌を披露。生徒も参観者も一緒に言葉と音を楽しみました。

◆ファンタスティックス

三月十七日には大ホールにおいて宮本亜門さん演出のミュージカル「ファンタスティックス」を開催しました。この作品は、昨年日本人として初めてブロードウェイで演出家デビューを果たした宮本亜門さんの帰国後第一作品ということで、高知市内外の熱心なミュージカルファンがかるぽーとに集まりました。

舞台上の両サイドにも客席を構え、観客を巻き込むユーモラスな演出で会場は盛り上がり、いつまでもカーテンコールを求める拍手が続きました。

◆ラ・ラ・ラ春まつりウイズ・ザ・ビートルズ・ボックス2005

三月二十一日には高知のアーティストプログラムとして、「ラ・ラ・ラ春まつりウイズ・ザ・ビートルズ・ボックス2005」を小ホールにて開催しました。

ラ・ラ・ラ音楽祭は、毎年九月に開催される市民手作りの音楽祭で、今回の公演にはラ・ラ・ラ音楽祭にゆかりのあるバンド五組が、ビートルズをテーマに演奏を行いました。

これまでの活動の紹介やビデオ上映も行われ、秋の本番を前に一足早い春祭りでは会場は盛り上がりました。

◆第21回写真コンテスト「高知を撮る」入選作品展・併催写真コンテスト20周年記念展

過去から現在まで、高知県内のさまざまな表情を伝えるとともに、未来の高知を考えていこうというコンテスト。三月十五日～二十七日、市

民ギャラリーで、今回の入選作品約七十点とともに、二十周年を記念して第一回以降の入選作品約三百三十点を展示しました。

昔の街並み、台風後の街の様子など懐かしく貴重な写真がずらり。会場では、熱心に見入り、盛んに語り合う鑑賞者の姿が多く見られました。

◆ミュージック・ストリーム

三月三十日、「ミュージック・ストリーム」未来に輝く若き奏者たち」と題した演奏会を大ホールで開催しました。

この演奏会は、今年度、高知県や四国を代表して全国大会で活躍した県内音楽団体を招いて、その功績をたたえらるとともに、完成度の高い演奏を披露してもらおうと企画したものです。初回となる今回は、高知学芸高等学校コーラス部、県立高知西高等学校吹奏楽部の皆さんが出演しました。各団体は、全国コンクールで演奏した曲を中心に、各校の特色を生かした演奏を精一杯披露し、最後は出演者全員による「翼をください」の合同演奏で感動的に幕を閉じました。



中須賀町の路地

細い迷路のような路地を歩くと、一昔前の住宅街の雰囲気がかろうじて味わえる。夕方には晩ご飯の匂いが漂い、野良猫が道を横切る。軒先には洗濯物が干され、テレビの音もどこからか聞こえてくる。道が狭いから車なんて入ってこない。こんな生活感が溢れる街並みは、高知遺産という以前に人間として当たり前に大切に、生活感を押し殺した「お洒落な美しい町」をつくるのが景観保全だと勘違いしている人たちに騙されてはいけない。

高知遺産
The Kochi Heritage 2003

風伯

五十八歳の抵抗

すでに中年とは言い難い歳にさしかかっていると、それだけで、さまざまな障害が現れはじめる。シワやシミ、各所のたるみなどはもちろんのこと、血液検査をすればかならず異常が見つかり、足腰の衰弱や頭髪の後退といったさまざまな身体的異変が起こってくる。そんなことは当然だと思っていたし、抗しがたいものだと思いついた。

これまでダイエットやお肌の手入れは女性だけのものと思いき、およそ健康や見かけには無頓着だった私は、そうしたことに歳とともに無関心ではいられなくなりました。ウオーキングをはじめ、サプリメントを飲み、どこか釈然としないまま男性化粧品で心を慰

めている今日この頃である。

そんな矢先、文化財保存の講義があつて聴きに行った。文化財の敵は紫外線などの光をはじめ汚れた空気や湿度などで、これによって文化財は次第に朽ちていき、それをいかに遅らせるかが自分たちの仕事のひとつだという話だった。

人体も紫外線や乾燥で肌にはシワやシミが増え、排気ガスやタバコで汚れた空気にまみれ、指定成分の摂取で活性酸素を活性化させてわたしの身体はあの文化財の何倍もの速さで酸化、急速に朽ち老死していへるわけである。

この人体の酸化原因である活性酸素を、抗酸化物質によっていかにやっつけていくか、それがこれからの大きな課題であるが、抗しがたい老化への歩みは、もはや手の施しようがないのではあるが……。

(冬重改め春愁)

第57回 市展
2005年 5/28日~6/12日
午前9時~午後7時まで
会場 高知市文化プラザかるぽーと [7F]

◆入場料
前売 300円
当日 400円
※15歳未満は半額
※10歳未満は無料

◆出品
5月22日(日)午後1時~午後7時
23日(月)午後1時~午後7時
24日(火)午後1時~午後7時
25日(水)午後1時~午後7時
26日(木)午後1時~午後7時
27日(金)午後1時~午後7時
28日(土)午後1時~午後7時
29日(日)午後1時~午後7時
30日(月)午後1時~午後7時
31日(火)午後1時~午後7時

◆アンテナダン

◆お問い合わせ先
市展事務局 TEL 088(883-5071)

期間：5月28日(土)~6月12日(日)
(ただし、月曜日は休館)
時間：午前9時~午後7時
(初日は午前10時開場、
最終日は午後5時終了)

入場料：前売300円・当日400円
※長寿手帳等所持者及び高校生以下は無料
会場：高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー

【関連企画】
美術体感イベント
「あなたダビンチ ぼくピカソ」
6月5日(日)午後1時~4時
かるぽーと前広場及び公民館各室
詳しくはチラシ参照。

※問い合わせ先
市展事務局 TEL 088(883-5071)

今号の表紙

「小さな緋色」 野口和葉

ある日、ふとしたことで芽生えた小さな想い。それは、まだとても不確かで、自覚することさえもままならない。

けれどそんな想いも、日々を過ごしていくなかで確かなものへと変わっていく……そして、自分の心の色に気付く時がきっと訪れるはず。

(のぐちかずよ)

高知を撮る

第21回写真コンテスト入賞作品

平和.仁淀川

(平成16年 いの町)

山崎 章男



平和の字があり、平和な川であるとの思いから撮影。

だが、近年、日本語の地位の向上はめざましい。

国立国語研究所の「世界言語センサス」(一九九九年)では、日本語が、英語、フランス語について、世界で重要とおもわれる言語の第三位とされている。

また、国際交流基金が世界規模でおこなった調査によると、一九九八

現代の日本語には、外来語、とくにいわゆる「カタカナ語」が氾濫していて、国立国語研究所の「外来語委員会」は、それらの日本語への言い換え案を、数次にわたって公表してきた。

外来語研究者・榎垣実氏によると、「原則的には、言葉は文化の高い方から低い方へ流れ込む」という。

外国語になった日本語



風俗歳時記

高騰、海水飄蕩」と表記されており、「津波」というこの現象をさす言葉として、固有に定着したものがないことを示している。

(朴)

加藤秀俊・熊倉功夫編「外来語になった日本語の辞典」は、海外で使われている日本語五十語を精選し、各語の故事来歴を綿密に解説している。《目からうろこ》の連続である。たとえば、わが国最古の津波の記載は、「日本書紀」の天武天皇十三年(六八四年)の土佐の国の地震による津波で、「大潮

インド洋巨大津波を報じる、アメリカのニュース番組をテレビで見ていると、女性アナウンサーが、「ツナミ」の語源は日本語で、「ポート・ウェイヴ(港の波)」を意味する」と解説していた。

年現在、正規の教育機関で、日本語を学習している人びとの数は、二百万人をこえている。

そこで、「ツナミ」以外にも、かなり多数の日本語が、諸外国の辞典や日常用語のなかに、「外来語」として登録されている。



やまたのおろち

音楽と朗読による幻燈劇&石見神楽「大蛇」

第1部
音楽と朗読による幻燈劇「やまたのおろち」
(アンサンブル・ココ)
「やまたのおろち」を音楽と朗読による幻燈劇として上演。
本来の神話の持つイメージを大切にしながら、クラシック音楽との
コラボレーションを図ります。
高知在住の音楽家たちによる、高知からの文化発信です。

第2部
石見神楽「大蛇」(日脚神代神楽社中)
世界的に評価が高い、島根県石見神楽「大蛇」。
8頭立ての大蛇が舞台狭しと舞姿は迫力満点。
子どもから大人まで神話の持つ不思議な世界をお楽しみください。

やまたのおろち 大ホール

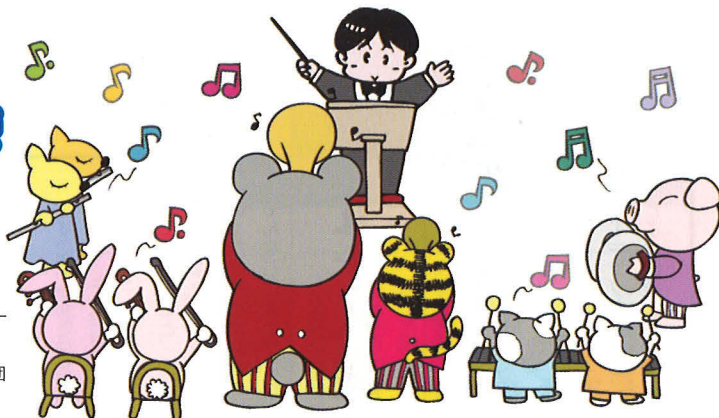
6月4日(土) 13:00開場 13:30開演

全席自由 一般 1,500円 (当日1,800円)
大学生以下 800円 (当日1,000円)
親子券 2,000円 ※3歳以下無料

わいわい! 子ども音楽会

“子ども連れて演奏会に行きたい”
“家族で音楽を楽しみたい”
“子どもに生の音楽を聴かせたい”
そんな要望にお応えする、かるぼーとからの贈り物。
楽器紹介コーナーや、指揮者にチャレンジするコーナー
など、親子で思いっきり楽しめるコンサートです。

【演奏】鏡野吹奏楽団



わいわい!子ども音楽会 大ホール

6月18日(土) 午前の部11:00/午後の部15:00開演 全席自由:一般券800円 子ども券500円 親子券1,200円 ※3歳未満無料

第4回 詩のボクシング 高知大会

Japan Reading Boxing Association Official Poetry Boxing

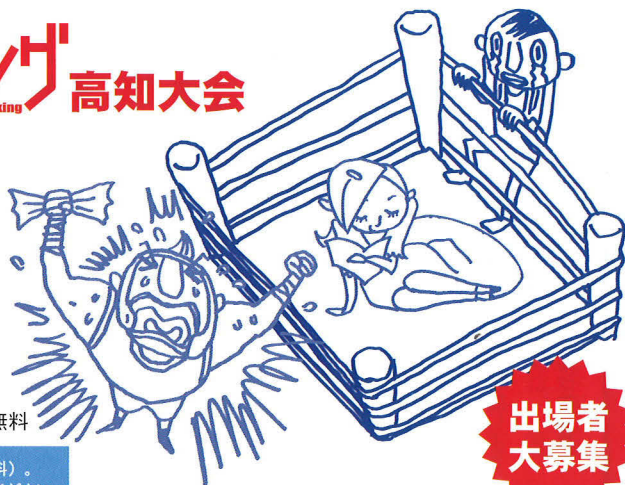
かるぼーとのオープン以来、毎年熱い戦いを繰り広げる
詩のボクシング。ボクシングに見立てたリング上で、
2人の朗読者が自作の詩を交互に朗読し、
どれだけ観客を惹きつけたかを競い合う『言葉の格闘技』です。
高知大会の優勝者は東京で開催される全国大会に
挑戦していただけます。皆さんのご参加をお待ちしています。

小ホール

第4回詩のボクシング高知大会

7月9日(土) 12:30開場 13:00開演
全席自由:一般1,000円 中高生500円 小学生以下無料

予選会は6月5日(日)13:30より小ホールにて開催(観覧無料)。
参加希望者は(財)高知市文化振興事業団までお申し込みください。



**出場者
大募集**